

妙法蓮華經見宝塔品第十一に「爾その時に仏前しつぽうに七宝の塔有り」云云。又云はく「即時に釈迦牟尼仏、神通力を以て諸の大衆を接して皆虚空に在きたまふ。大音声だいおんじょうを以て普く四衆に告げたまはく、誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かん。今正しく是時なり。如来久しからずして当に涅槃まさに入るべし。仏此の妙法華經を以て付嘱して在ること有らしめんと欲す」云云。又云はく「諸余の經典かすごうじや数恒沙の如し」云云。又云はく「諸の大衆に告ぐ。我が滅度の後に誰か能く斯の經を護持し読誦せん。今仏前に於て自ら誓言を説け」と。又云はく「此の經は持ち難し。若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す。諸仏も亦然なり。是くの如き人は諸仏の歎めたまふ所なり」云云。妙法蓮華經勸持品第十三に「爾の時に薬王菩薩摩訶薩、及び大樂説菩薩摩訶薩、二万の菩薩眷属ともと俱に、皆仏前に於て是の誓言なを作さく、唯願はくは世尊、以て慮うらおもひしたまふべからず。我等仏の滅後に於て当に此の經典を奉持し読誦し説きたてまつるべし。後の惡世の衆生は善根うたた転少なくて増上慢多く、利供養を貪り不善根を増し解脱おんりを遠離せん。教化すべきこと難しと雖も、我等当に大忍力を起こして此の經を読誦し持説し書写し種々に供養して身命を惜まざるべし。爾の時に衆中の五百の阿羅漢の授記を得たる者、仏に白して言さく、世尊、我等亦自ら誓願すらく、異の国土に於て広く此の經を説かん。復、学無学八千人の授記を得たる者有り。座よ従り起たつて合掌し、仏に向かひたてまつりて是の誓言なを作さく、世尊、我等亦当に他の国土に於て広く此の經を説きたてまつるべし。所以は何。是の娑婆国の中は人、弊惡多く、増上慢を懐き、功德浅薄に、瞋濁諂曲にして心不実なるが故に」云云。又云はく「爾の時に世尊、八十万億那由他の諸の菩薩摩訶薩を視す。是の諸の菩薩は皆是れ阿惟越致なり。即時に諸の菩薩、俱に同じく声を発して偈を説いて言さく、唯願はくは慮うらおもひしたまふべからず。仏の滅度の後、恐怖惡世の中に於て我等当に広く説くべし。諸の無智の人の惡口罵詈等し、及び刀杖とうじょうを加ふる者有らん、我等皆当に忍ぶべし。惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に、未だ得ざるをこれ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。或は阿練若に納衣にして空閑に在り、自ら眞の道を行ずと謂ひて人間ぎょうせんを輕賤する者有らん、利養とんじやくに貪著するが故に、白衣びやくえの与に法を説いて世に恭敬くぎょうせらること六通の羅漢の如くならん。是の人惡心を懐き、常に世俗の事を念ひ、名を阿練若に仮りて好んで我等の過を出さん。濁世の惡比丘は仏の方便隨宜所説の法を知らず、惡口して鬻ひんじゆく鬻しばしばひんずいし数々擯出せられん」云云。

文句八に云はく「初めに一行は通じて邪人を明かす、即ち俗衆なり。次に一行は道門増上慢どうもんぞうじょうまんの者を明かす。三に七行は僭聖増上慢せんしょうぞうじょうまんの者を明かす。故に此の三の中、初めは忍ぶべし、次は前に過ぐ、第三は最も甚し」云云。涌出品に云はく「爾の時に他方の国土の諸の來たれる菩薩摩訶薩は八恒河沙の數に過ぎたり。大衆の中に於て起

立し合掌し礼を作して仏に白して言さく、世尊、若し我等に仏の滅後に於て此の娑婆世界に在って勤加精進して、是の經典を護持し読誦し書写し供養せんことを聴したまはゞ、当に此の土に於て広く之を説きたてまつるべし。爾の時に仏 諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまはく、止みね善男子、汝等が此の經を護持せんことを須ひじ。所以は何。我が娑婆世界に自ら六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り。一々の菩薩に各六万恒河沙の眷屬有り。是の諸人等能く我が滅後に於て護持し読誦し広く此の經を説かん」云云。^{五卷畢}

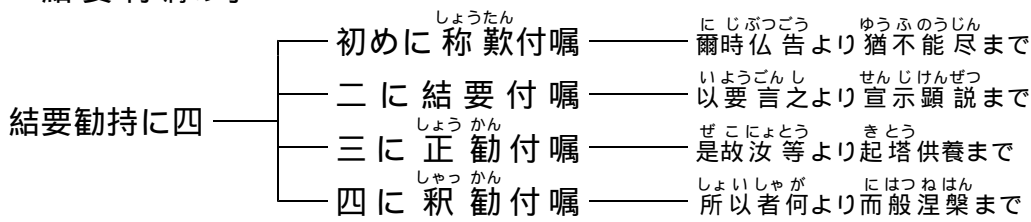
囑累品に云はく「爾の時に釈迦牟尼仏、法座より起って大神力を現じたまふ。右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩でて是の言を作したまはく、我無量百千万億阿僧祇劫に於て、是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今以て汝等に付囑す。汝等当に一心に此の法を流布して広く増益せしむべし。是くの如く三たび諸の菩薩摩訶薩の頂を摩でて是の言を作したまはく、我無量百千万億阿僧祇劫に於て、是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今以て汝等に付囑す。汝等当に受持し読誦し広く此の法を宣べて一切衆生をして普く聞知することを得せしむべし。所以は何。如来は大慈悲有って諸の慳悋無く、亦畏るゝ所無く、能く衆生に仏の智慧・如来の智慧・自然の智慧を与ふ。如来は是れ一切衆生の大施主なり。汝等、亦心に随つて如来の法を学すべし。慳悋を生ずること勿れ」云云。

文句の九の涌出品涌出品のに云はく「如来之を止めたまふに凡そ三義有り。汝等各々に自ら己が任有り。若し此の土に住せば彼の利益を廢せん。又他方は此の土結縁の事浅し。宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無からん。又若し之を許さば則下を召すことを得ず。下若し来たらずんば迹を破することを得ず、遠を顯はすことを得ず。是の三義をもって如来之を止めたまふと為す。下方を召して来たらしむるに亦三義有り。是れ我が弟子なり、我が法を弘むべし。縁深広なるを以て能く此の土に遍して益し、分身の土に遍して益し、他方の土に遍して益す。又開近顯遠することを得。是の故に彼を止めて下を召すなり」云云。

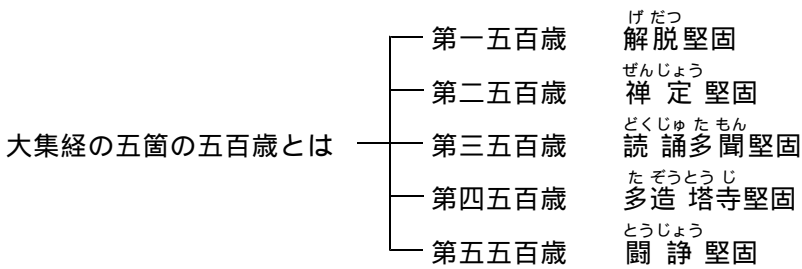
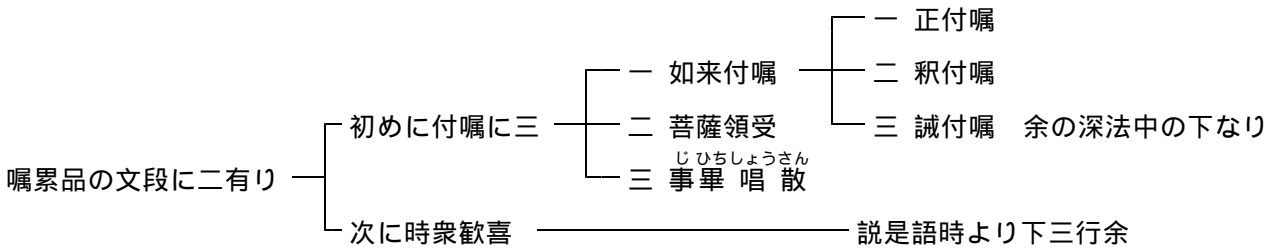
記に云はく「問ふ、諸の仏菩薩は共に未熟を熟す、何の彼此有らん。分身散影して普く十方に遍す。而るを己任及び廢彼と言ふや。答ふ、諸の仏菩薩は實に彼此無し。但機に在無有り、無始法爾なり、故に第二の義を以て初めの義を顯はして結縁事浅と云ふ。初め此の仏菩薩に従つて結縁し、還つて此の仏菩薩に於て成就す」云云。又云はく「子父の法を弘むるに世界の益あり」云云。記の八に云はく「因藥王とは、本藥王に託して茲に因せて余に告ぐ。此流通の初めなり。先づ八万の大士に告ぐとは、大論に云はく、法華は是秘密なれば諸の菩薩に付すと。下の文に下方を召すが如きは尚本眷屬を待つ。驗らけし、余は未だ堪へず」云云。問ふ、何が故ぞ他方を止めて本眷屬を召すや。答ふ、私の義有るべからず。靈山の聽衆は天台の所判に任す。疏に云はく「涌出を三と為す。一には他方の菩薩弘經を請す。二には如来許したまはず。三には下方の涌出なり。他方

の菩薩は通經の福の大なることを聞いて、^{ことごと}咸く願を發し此の土に住して弘宣せんと欲するが故に請す。之が為に如来之を止めたまふ」等云云。

結要付嘱の事



疏の十に云はく「爾時仏告上行の下は是れ第三の結要付嘱なり」云云。又云はく「結要に四句有り。一切法とは一切皆是れ仏法なり、此は一切皆妙の名を結するなり。一切力とは通達無碍にして八自在を具す、此は妙の用を結するなり。一切秘藏とは一切処に遍して皆是れ実相なり、此は妙の体を結するなり。一切深事とは因果は是深事なり、此は妙の宗を結するなり。皆於此經宣示顯說とは總じて一經を結するに唯四ならくのみ。其の枢柄を撮って之を授与す」云云。記に云はく「結要有四句とは、本迹二門に各宗用有り。二門の体は兩処殊ならず」云云。輔正記に云はく「付嘱とは此の經は唯下方涌出の菩薩に付す。何を以ての故に爾る。法是久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」云云。



夫仏滅度の後二月十六日より正法なり。迦葉、仏の付嘱を請け、次に阿難尊者・次に商那和修・次に優婆塞多・次に提多迦なり。此の五人は各々二十年にして一百年なり。其の間は但小乘經の法門のみ弘通して諸大乘經は名字もなし、何に況んや法華經をや。次に弥遮迦・仏陀難提・仏駄密多・脇比丘・富那奢等の五人、五百年の間大乘の法門少々出来すと雖も取り立てゝ弘通せず、但小乘經を正と為す。已上大集經の前の五百年、解脱堅固に当たれり。正法の後の五百年には馬鳴・竜樹乃至師子等の十余人の人々、始めには外道の家に入り、次には小乘經を極め、後に諸大乘經を以て散々に小乘經等を破失しき。然りと雖も権大乘と法華經との勝劣未だ分明ならず。浅深を書かせ給ひしかども、本迹十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当等・百界千如・一念三千の法門

をば名をも書き給はず。此大集經の禪定堅固に当たれり。次に像法に入つては天竺は皆權實雜亂して地獄に墮する者数百人ありき。像法に入つて一百余年の間は漢土の道士と月氏の仏法とじょうろん 諍論して未だ事定まらず、故に仏法を信ずる心未だ深からず、まして權實をわ 分くる事なし。摩騰・竺法蘭は自らは知つて而も大小を分かつたず。權實までは思ひも依らず。其の後、魏・晋・宋・齊・梁の五代の間、漸くようや 仏法の中に大・小・權・實・顯・密をあそ 諍ひし程に、何れを道理とも聞えず。南三北七の十流、我意にしか 仏法を弘む。爾れども大いに分かつに、一切經の中に一には華嚴、二には涅槃、三には法華と云云。爾れども像法の始めの四百年に当たつて、天台大師しんだん 震旦に出現して南北の邪義一々に之を破し畢んぬ。此大集經の多聞堅固の時に当たれり。像法の後の五百年には三論・法相乃至真言等を各三蔵將來す。像法に入つて四百余年あて、日本国へくだらこく 百濟国より一切經並びに釈尊の木像僧尼等を渡す。梁の末、陳の始めに相当たる、日本国には神武天皇より第三十代欽明天皇の御宇なり。像法の後の五百年に、三論・法相の六宗、面々の異義あり。爾れども各邪義なり。像法八百年に相当たつて、伝教大師日本に出でて彼等の六宗の義を皆責め伏せ給へりと云云。伝教已後には東寺・園城寺等の諸寺、日本一同に云はく、真言宗は天台宗に勝れたりと云云。此大集經の多造塔寺堅固の時なり。今末法に入つてどうじょうごんしょう 仏滅後二千二百二十余年に当たりて聖人出世す。是は大集經の鬪諍言訟・白法ほうおんもつ 隱没の時なり云云。夫釈尊の御出世は住劫第九の滅、人壽百歳の時なり。百歳と十歳との中間は、在世は五十年、滅後は正像二千年と末法一万年となり。其の中間に法華經流布の時二度之有るべし。所謂在世の八年、滅後には末法の始めの五百年なり。

夫仏法を学する法には必ず時を知るべきなり。過去の大通智勝だいつうちしやうぶつ 仏は出世し給ひて十小劫が間一偈をも之を説かず。經に云はく「一坐十小劫」云云。又云はく「仏時未だ至らずと知らしめして請を受けて默然として坐したまへり」と。今の教主釈尊も四十余年の間は法華經を説きたまはず。經に云はく「説時未だ至らざるが故なり」等云云。老子は母の胎に処して八十年、彌勒菩薩は兜率の内院にして五十六億七千万歳を待ちたまふ。仏法を修行せん人々時を知らざらんや。爾らば末法の始めは純円一実流布とは知らざれども、經文に任ずに「我滅度の後、後五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」云云。誠に以て分明なり。